

りかひのやあみ



第 壹 卷 第 壹 號

要 目

みおやの光發刊の表白……………

本誌發刊の趣旨……………

○講 話

みおやの實在…………… 辨 榮 上 人

信後の感想…………… 中 村 禪 定

○詞 藻

○信者の聲

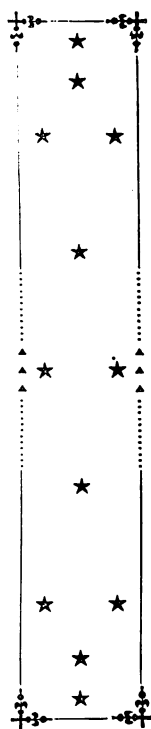
信仰所感…………… 佐々木了玄

夏日偶感…………… 奥村辨誠

○雜 錄

唐澤山御別時、松戸日曜少年教會生る、松戸光明會規  
則並會員名

發刊の表白



光のやあみ  
創刊號

謹み敬つて我が信樂する所の唯一の尊き大みおやに告白し上る。我等はもご心闇くして大みおやの在すことを識らざりき。然るに教祖釋迦牟尼佛の御教に依りて我等はみおやの在すことを信知するに至れり。我等が恩寵を被りて光明の裡に活き働きつゝあることを得たるは全く恩寵の然らしむ處に深く感謝し奉る。我等はあなたの無窮の恩を報ぜんが爲に聖旨を世の同胞に知らしめ、恩恵を世の人々に預ちて共にあなたの光明の下に聖意に契ふ人となりて價値ある生活をなし、永遠の幸福を共にせんことを期しこゝに小雜誌を發刊す。

願くは大慈の父よ、聖旨を世の同胞に預つに聖意に違ざるやう神力加被を垂れ給へ。

毎月十日、二十日 午後二時と同八時より 念佛會説教 千葉縣松戸町二 光明會松戸教會所	毎月一日、十五日 午前八時より 光明會別時念佛會開催 東京芝公園十四ノ九多 聞 室	臨時光明會念佛會開催 東京麻布區六本木町 光 専 寺	毎月十五日 光明會念佛會説教 午後一時より 千葉縣葛木村五番 善 光 寺	毎月一日 光明會念佛會説教 午後一時より 千葉縣布織村 光明教會所
--	---	-------------------------------	---	--------------------------------------

# 發刊の旨趣

眞に惟みるに九蒼の無窮なる之を盡げば彌高く之を觀すれば益々深玄。天に日月星辰は其軌を逸せずして循環し、地には四時行はれ百物生ず、宇宙の無限なる中に過去遠々未來邈々たる中に我等が生るの微なる翳々冥々として自ら其の源を究め其奥を測るの智なく、天地萬物に細大なく所有萬物を統へ攝め、造化の妙用を觀すれば之が根本となり又、其中心となり萬物の歸趨する處の本體なるべからず。換言すれば一切萬物は何ものにか産み出され又、生育されて居るものなれば萬物の一大本源即ち一の大みちやなくてはならん。我等一切衆生の大本の御親は何なるものなるか、無知なる我等知るこそ能はざりし。然るに我等が教祖釋迦牟尼は其のこそ、本有法身無量壽佛より身を分けて此世に出給へし聖者なるが故に自ら叫んで曰く「三界は我が有なり其中の衆生は皆我が子なり」この金言は我等一切の無明の迷子等のために一道の光を與へ給へり。我等は教祖の御教によりて獨りの大みちの實を信知することを得たり。誠に是れ喜ぶの極みならずや。釋尊は假に人間の身を受け給へども實には本有法身無量壽佛に在ます。我等は教祖の密教に依て大御親を信知することを得たのみでなくみちの智慧と慈悲との光明に育まれて靈性開け

て正しく父子の最も親密なる因縁によりその光明の中に意義ある生活を遂行することを得る、實に是れ人生の最幸といふべきである。大唐の聖善導は我等と御親との間に親縁と近縁と増上縁との最も強き力を以て我等を助け給ふ所以を示されてある。我等は弱きものなれば大みちの強き力を仰がざれば正しき道を進み行くことは出来ぬ。我等が先輩(諸の聖者)はみな御親の光を享けての世の爲め人の爲に偉大なる働きを以て御親の光榮を現はし熟誠に時代の人々を導きて光明の下に誘引なされた。

我等はみちやを信じ、自己は實に聖子なりとの自覺を得れば一切の人々は悉く同胞であることを信解するに至らん。尙、世の同胞諸士に告ぐ、我等は如來の子たること共に人の子である、人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮鼓が強く結び付て居る、是がために動もすれば自己を暗黒に引込れて惡道に陥れんとして居る。佛子としての聖き心は微にして却々顯れ難く、みちの恩寵を被り光明に靈化せられて疾く光明の下に生活し得るやうに専らみちの恩寵を仰ぎ慈光に導かれんことを期すべきである。

みちやは清淨と歡喜と智慧と不斷との光明を以て我等が暗黒より解脱し得るの御力を與へ給ふ。人生再び逢難し一日の光陰も皆是れ御親の賜なればこの尊き光明の中に生活を得る吾人は全力をつくして天分を果さんことを。今こゝに小雜語を發行して我が同胞衆に願つことはみちの聖意を普く世に知らしめて共に光明の下に生活し得る御親に報いが爲めである。願くば發起某甲の微衷を諒察し給へ。

佛 陀 禪 那 敬 白



◎みおやの實在

山崎 辨榮

宗教心即ち信仰を立んには先づ第一に私共を救霊ひ給ふ大慈父即ち一の大御親の實在を信じて之に歸命信頼する處に宗教心は成立するものである。更に云はば宇宙には一切衆生を悉く我が子として平等の慈悲を以て無條件に救ひなされる大みおやの在することを確信するのである。教祖釋尊の此世へ出で給へしも唯一のみおやの實在を教へてすべての衆生をして我は佛子なりとの自覺を興えみおやの全き如くに全き人格と爲さんが

して居るものが多いやうである、今吾人は宗教的信仰を以て三身を説明せんとす、故に説明の方法が自づと變つて居る。一、法身はまた見處遮那と云ふ徧一切處の義にて宇宙全體に亘つて是れ活ける絕對人格と云ふ意味である。法身を哲學的に解する人は理法身智法身等と云つて法身とは單に一の理であると思つて居る、彼等には宗教的に云ふ絕對人格の永恒に活ける大みおやを觀ることは出来ぬ。密教には宗教的なる宇宙全體に亘れる地水火風空の物質と識大の心質とは元、一體兩面なので宇宙は總體的に活ける法身佛と仰て居る。楞嚴經は純宗教的ではないが宇宙を稱する地水火風空識大も亦、外界の色彩香味觸も人の眼耳鼻舌身の識も種々様々の働きを表現して居るけれども其の大本は如來微妙眞如性と云ふ宇宙絕對は一の大きな心盤であると説て居る。若し夫を宗教的に云はば宇宙全體の絕對人格と云ふことになる。けれども彼は汎神論的であるから大御親と子との區別を立て、居らぬから宗教としては物足らぬ感じがする。佛教の哲學的方面としては

ため教化を垂れ給ふたのである。我が教祖釋尊は人類と等しく人の身を以て世に出給へども其の御本體は法身無量壽如來にまします故に法華經に「三界は皆我が有なり其中の衆生は悉く我が子なり」と仰られしは暫く人間の身を受給へども其の御本體は法身無量壽佛に在す故に久遠却より在す處の大みおやであるが故に一切衆生悉く我子なりと宣たまふたのである。

佛教は哲學であると共に宗教である。宗教的に所謂大みおやを哲學的には眞如とか法性とか又は第一義諦等の名を以て呼んで居る、宗教的に云はば宇宙全一に活ける尊きみおやなれば法身又は如來と云ふ。我等實在に活ける宗教心を以て觀る時は宇宙に絕對的に實を唯一の大御親と信せざるを得ぬ。みおやは絕對的に大にして唯一に在ますけれども三身を以て我等衆生の爲に大みおやの働きを現し給ふ。今暫く三身の義を略説せん。三身とは法身と報身と應身である。從來の佛教家は三身を説明するに哲學的方面の方に解釋

巧妙なるも宗教としては有難くない説が多い。我等は楞嚴經に云ふ絕對心盤を其まゝ絕對人格として而も眞尊と云ふ一つの絶対人格と仰ぎたい、否、尊く仰がざるを得ぬのである。又佛教の汎神論的に我は是れ佛なりと云ふ説も宗教としては有難くない。矢張如來に絕對人格即ち宇宙の大みおやにして我等は其の子なので、大御親より禀たる佛性を具有して居ると共に世界の因縁から受けたる人の子なる罪惡の根、煩惱と云ふ悪い素質をも併せて居る。大みおやより禀たる佛性は自分の力での之を開きて圓滿なる徳を顯すことは出来ぬ。又、自己の煩惱の素質を自分で解脱して完全なる道徳と靈化する事も出来ぬ。佛性を開發し煩惱を靈化して圓滿なる人格とならんに報身、量光如來の光明を仰がねばならんと信す。故に宗教は報身佛が最も尊いので宗教の中心本尊は報身佛である。二、報身佛は梵に盧遮那と云ふ、宗教としては是が中心本尊である、之に淨滿と光明遍照との二義あり、宇宙最高の處に在して金剛瓔珞寶石等の種々の寶を以て

莊嚴せる清淨と安樂と自在と常住の永しへに光明輝く處に最も麗しく相好圓滿の尊容を以て光明常に照し無量の菩薩衆の爲に恭敬し圍繞せらる。十方一切の聖者は歸する處此に到るのである。是の人格的最高位に在ます尊體こそ報身如來である。又、一方には智慧と慈悲との光明、遍く十方世界を照して而して信念する處の衆生を光明の中に攝めて其心を清め復活せしむ。報身佛は絕對的精神界の太陽である。自然界の太陽は此の肉體の世界を照して一切の生物を生育し活動せしむ、報身如來の光明は人の精神界を照して靈性を復活せしめ給ふ。人の肉體が太陽の光りを離れて生育することが出来ぬ如く我等が靈性は如來の智慧と慈悲との光明に照されざれば進化し向上することは出来ぬのである。喩へば我等が法身から受けた靈性は鶏の卵のやうなものである。報身の慈光に攝取せられて初めて卵に孵化するやうに我等が清き靈性が復活するのである、乃で初めて活きた信仰となりて光明の中に清き生活することが出来る。人は此處に至つて初

て凡ての學藝を習ふに奧妙を究めずと云ふことなし。尊きこと天子たり富四海を保つ、人間として此上もあき果報の御身分なるにも保らず、老病死を見て世の無常を悟り國を位を棄て、山に入り道を學び勤苦六年の修行を経て終に摩訶陀國の菩提道場に於て一夜天魔の妨害を降伏し、十二月八日の曉に罪惡の根を斷ち無明の闇を破り朗かに無上正覺を取り給ふた。宗教的に謂はば是までは人間の子として生れた罪の身であつたが彌陀の光明を被ひて精神が生れ更り光明中の人となり給ふたのである。夫より五十年の間は専ら暗に迷へる衆生を救ひ導きて光明の大道に入らしめられ、竟に八十の御年御戸那國跋提河の邊りにて入滅遊した。御身は茶昆一片の輝りと消給へども御靈神は本の淨き御國なる無量壽國に御還り遊ばしたのである。釋尊の御生涯は唯、凡ての人々を闇の理より光明の生活に誘ひ入れたのである。

斯く三身に分れて在すと雖も元は一體である、法身として天地萬物の本體にして一切衆生を生み且つ活し

めて大みおやと親子の親しみができ永遠の生命となるのである。而して此の肉體の命盡る時は正しく大みおやの光榮と幸福との光明輝く御許に還りて永恒にみおやと幸福を共にするのである。故に縱今人と生れてもみおやの恩寵を被ひざれば親子の應酬する如くに永く神識は闇黒の中に墮落して仕舞はなければならん今此の雜誌を發行するの實はみおやの光明を世の同胞衆に頒たが爲めである。斯く大なる御親の光明は永しへに照しつゝあるも若し人佛釋迦尊が此土に出現して教を垂れ給はずば我等は報身如來の光明を受けることは出来ぬのであつた。されば應身教祖の御恩徳を深く感謝せねばなりません。

三、應身佛とは釋迦如來のことである。假に人間の身を以て此世に御出ましなされて衆生の救の道を救ひなされたみおやである。釋尊はもと御神識は報身彌陀如來から身を分けて此世へ御出ましなされたのである。中天竺は摩訶陀國に生れ御父は淨飯大王にて御母は摩那夫人と申上げ、幼名を悉達太子と號け智覺總持に

て下さる御働にて報身佛は私共の法身から受けた靈性を開發し又、煩惱を靈化する爲に智慧と慈悲との光明を以て念ずる衆生を攝化し給ひ、應身として人間世界に御出ましになつて人類にみおやの聖意を教へ給ふのである、故に歸する處は一體の三面に過ぬのである。(未完)



◎信後の感想

中村禪定

私は幼時信仰の家庭に育てられまして無意識にも佛は尊い御方である、難有いものであると心得て居りました。朝起きて佛を拜まなければ朝飯は頂戴せんと、晩餐を済ませば又た必ず佛前に跪座し唱へて、禮拜して寝に就くと云ふやうに習慣づけられて居りました。道を行くにも縦合頭なし地蔵でも路傍にあれば其前を通る時には必ず草花を手向け拜禮して過ぐるのが例でありました、こんなふうですから何うしても出家したいと云ふ志望が胸に絶えませんでした、十七歳の春父兄に請ふて菩提寺へ参り弟子にして貰ひましたが愈々翌年の春四月八日に得度式を受け出家の一分となつた時

めたいと云ふ野六にのみ満されて居た、一度寺院に住職して已來と云ふものは一層物質欲に眩惑されて信仰心杯は夢にも起らなかつた、只今桑園を開拓するとか果樹を仕立るとか或は養鶏に養殖に斯る不應作のことに身心を勞役して居つて何等檀信徒を教化すると云ふ様な考は毛頭持たなかつた。然るに大正二年八月長岡市法蔵寺に教養講習會が開催されました。講師は笹本文學士五日間の講習中笹本講師の謙遜なる態度と熱誠なる信仰とに動かされて初めて幾分か惭愧の心も起り反省心も萌して來た、其翌年より辨策上人の醫隊に属れ爾來數々上人の御教化を享けて漸々疑いの雲も晴れ暗黒の理より光明界に引出される様な気分になつて参りました。

の嬉しさ其の時の意識状態は何とも形容する詞がありません。其夜窃に本堂へ参り佛前に靜座して佛恩の難有さに感泣して居りました、頓て深更に至り小用に参るべく庫裡の方へ下つて参りますと師匠は其足音に感付き夜盜と誤られて大なる混棒を以て追掛けられた、自分であつたことが解つたから一擲の笑草となつて事は済だが此んな滑稽を演じたこともある。亦其年の秋一通の書を遺して自坊を出奔し管谷の不勤尊へ参籠し數日祈念を凝らしたこともあつた。今から其當時のことを願ひますと如何に求道の念に熱烈で有たか云ふことが思へ知れず。然るに其後二十三歳の春初めて長野第三教校へ入學しました、學生間にオールドマンと呼ばれて居たことは今に記憶して居ます。在學四年次で小石川高等學院へ入學しましたが間もなく師匠に逝かれて止むなく退學し師籍を繼いで任職することになりました。私は學校生活に入ると同時に思想は一變し幼年時代の信仰は何時しか忘失して仕舞つて徒に名譽欲に驅られ、學者になりたいとか高き位置を求

いてゐて御親を泣かせ申て來たことを思へば何とも申譯のない慚愧の至りである。本徳上人の御歌にも心から地獄も餓鬼も造るなり盡十方は彌陀のよごころと現にみおやの光明中に在りながら心暗くして信仰の慈愛の懷に抱かれつゝありながら心暗くして信仰の眼開けざるがため、貪欲の心を恣にしては餓鬼界を夢み、瞋恚の心を起しては修羅道を演じ、愚痴の爲には畜生界の苦を感じて不平を起し不満を抱き苦病を背み煩悶を重ねつゝ彷徨ひ來りし淺間しよ眼が覺めて見れば恥かし寢小便。是まで寺に住職して居たのは何が爲であつたらう、耕さずして食ひ糞らすして着る皆是れ佛祖の餘恩にあらずや然るを徒に佛物を汚し信施を私し敢て利他の淨業を修せんとせず思へば業果の程も恐ろしく責ては業障懺悔のため諸國行脚の身となりて念佛修行を仕て見たいと思つて居たが幸、本年春弟子が宗教大學を卒業して歸つたから彼に寺を譲り天臺堂に頭りを

— ( 6 ) —

— ( 7 ) —

際し股引脚絆の旅装にて寺を出たのは當年四月廿六日當國一の宮瀨彦神社へ参拜し次で佐渡が島根を一周して新潟へ歸航し善導寺へ参りしに折しも辨策上人御法話中であつた。上人に拜謁して仔細を申述べた所が上人の仰に、當年東京在の松戸と云ふ町に教會を創立したから其所へ参つて教會の爲に働いては呉れぬかとの御詞、私も自己の信する教義の許に働くのは本望であるから上人の御詞に隨ひ、其より上人に随行して三條、長岡、柏崎、高崎等を経て六月十三日松戸町へ着し同十八日當教會の開庭式を舉行し、爾來當教會に留守居をさせて貰つて居ります。是れ偏に如來の御引合せと上人の御高庇に依ること、深く感謝して居ります。

であるから草一本でも虫一疋でも皆如來のみ力とみ恵とに依つて活かされて居る譯である、して見れば私共が斯うして日々衣食して居るのも皆如來のみ力とみ恵とに依るのである。斯くも廣大なる恩寵を被りみおやの慈愛深き光明中に在り乍らどうして不平を洩らし不足を云ふことが出来ませうか。私は一人ですが近頃は自炊して居りますが米三合に麥一合の割で御飯を炊き一度は飯と汁次にはお茶漬け次には御粥次に雑炊と云ふ順序にして飯べて居りますが其の美味いこと、已前には二圓三圓の料理を飯べてもとても此んなに美味くは感じなかつた。何故であらふか其の當時は二圓なら二圓三圓なら三圓の價値しか認めなかつた、然るに今はたとへ御茶漬一杯でも雑炊半膳でも粒々辛若老農の膏であるのみならず一粒一菜皆如來の廣大なるみ恵が籠つて居るのだと思へば無限の價値を認めるからであります。私は世の中に何も望みはありません。たいく此の無限の悦びを一人にても多くの人に類から與えて共に御親の光明中に安く楽しく

— ( 8 ) —

— ( 9 ) —

私は是までは精神的孤兒でありました、何ものにも頼るものはなかつた、然るに今は慈愛深きみおやの懷に抱かれて居ると思へば百萬の味方を得たよりも力強き感じがします。淋しい時にもあなたを想へば慰まめて下さる、心に心配の發つた時にもあなたを念ずれば頓て解決を付けて下さる、不平の起つた時にも不平の生じた時にもみおやの慈悲に絶れば皆打ち消して下さる、心に叶はぬことがあつても身に難儀なことが振りかひつて來てもみおやの光明中に生活して居る私だと思へば是も前世の因縁か又はみおやが私のため之心を磨き身を鍊るための御手まわしかと思へば却て有難く感じられます。身も心も凡てみおや任せの身であればみおやは決して私のために悪しくは取り謀つては下さらぬと信じて居るからであります。私は未だ淨土の莊嚴を感見することは出来ませんが天を瞻ても地を見ても山姿水態其儘が極樂の莊嚴であるかの様に視られます。天地萬物一つとして如來の御力と御恵みに依らざれば存在することは出来ないの

暮らして頂きたいと思つた、是より外に私の望みはありません、之が私の望みであります。

- △吾れ眞理を愛す、如來は眞理の體現者なり、故に吾れ如來を愛す。
- △吾れ正義を欲す、如來は正義の實現者なり、故に吾れ如來を信す。
- △吾れ愛者を慕ふ、如來は愛の完全者なり、故に吾れ如來を慕ふ。



— ( 10 ) —

— ( 9 ) —

詞藻

十二光佛

辨榮上人作歌

無量光佛 量りなき三世の佛のかすくは
無邊光佛 世を照らすさどりの海はそこひなく
無礙光佛 世の人の心を照らすみひかりは
無對光佛 たくらぶるものこそなげれいと奪き
娑王光佛 いかばかり罪の薪はつもるとも
清淨光佛 見るにつけ聞くにつけても染やすき
歡喜光佛 歡びの光りに逢はんとことはに
のどけき春の心地こそすれ

智慧光佛

みげさけのさとき光りに照し見よ
不斷光佛 断えなくば海水さへも涙みつくす
難思光佛 眼に見えぬ思ひにもまた及はぬは
無稱光佛 嬉しどもまた樂しども言の葉に
超日月光佛 月も日も及はぬ人のこゝろまで
佛のみ子 佛は我等のみおやなり
慈悲の光に照されて 御子のつとめ
我等は佛のみ子なれば 釋迦はすなはち教ぬし
同

三世の佛は知識にて
教主の教にしたかひて
みおやの道に進むこそ

望き同胞

同人

生きとし活ける人はみな
生みなされたる子らなれば
たどれば春の長閑けさに
めぐみの光りに咲きにける
心の花のかくはしき

復活

奥村妙々子

復活のこゝろ抱きて眺むれば
死なずてふ強きこゝろを得てしより
獨尊のみはとけを父となせし身に
限りなきのぞみに生きて水くめば
すこせしことを悔しと思ふ

信者の聲

信仰所感

佐々木了玄

或日私が怒の餘り弟を打つた時私の母は歎かれまし
た而して諭されました。現在母の目の前で血肉を分け
た弟を打つと云ふ理があるかい、其も十や十一の子供
でなし父様が遊うなつて女一人だと思ふて...母の眼
には涙が光つて居ました。
嗚呼此の事件、性來短氣の私は煩惱と知り乍ら瞋恚の爲
に使役せられて弟を苦しめ、業報と聞き乍ら罪報を甘
受するを得ずして母を泣かせました、斯うして私は常
に「かゝる悲惨なる運命を持ち乍ら尚ほ煩惱を追ふて居
ました。如くを未來の世話役ごのみ思ひ現在の私は煩
惱を専有物として居ました、如來は現在を通じて未來

永遠の救済主でまします、今現に此に在りて光明
を以て念佛の衆生を攝取して捨給はず經には「其れ衆
生ありて斯の光に遇ふものは三垢消滅し身意柔軟に歡
喜踊躍して善心生ず」とありまます、如來の光明に住す
るものは煩惱の鬼にも害せられず妄念の魔にも障られ
ず常に平安を得られます、私は一日として如來を離る
ゝことは出来ません一時も光明より脱することは出来
ません。
親鸞聖人の御和讃にも
子の母を想ふ如くして 衆生佛を憶すれば
現前當來遠からず 如來を拜見疑はず
とあります、私は煩惱妄念の起る毎に佛を憶ひ南無阿
彌陀佛と如來の御名を呼び上ることに依て如來の光明
に攝取せらるゝことを得まます、縱令煩惱に障障られて
攝取の光明を見ずと雖、恐怖の中にも靈力を感じ衆苦
の中にも慈愛を味ひ、而して直に平安を得ることが出
來まます、皆々と共に念佛して光明に攝取せられ現在
を通じて永遠に平安を得んことを希望いたします。

○夏日偶感

奥村辨誠

庭の中に五六杯の鉢植があります。此頃の日早りで大...

其處で手を洗ひ口を漱ぎ約一町程上に本堂がある。當...

雜報

教會便り

唐澤山の念佛三昧會 唐澤山念佛會に参加すべく菊地氏は八月十五日朝當...

- 田中 小要判 江坂 あい子 伊海 健郎 内藤 萬吉...

松戸日曜少年教會生る

常町初生龜太郎氏次男徳二(當年十二歳)父と共に唐澤...

説し危険視するものがある。けれども彼等は全く宗教を...

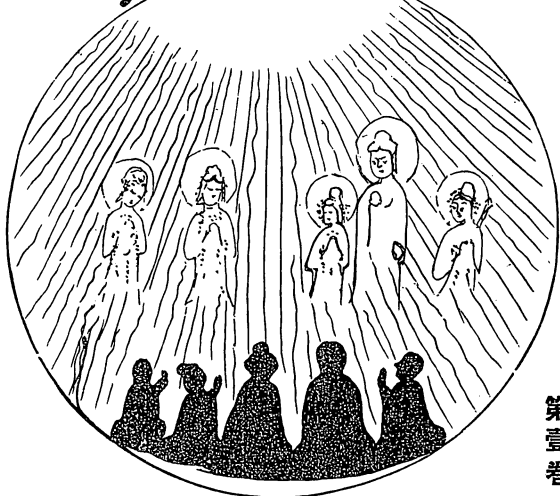
會員芳名

- 松戸町一丁目 特倉田徳兵衛 特伊藤まき子...

- 第一條 本會ハ光明會松戸教會本部ヲ松戸町二丁目松戸教會所...



# りかひのやのみ



## 第壹卷 第貳號

要目	佛子の自覺 光明生活…… 山崎 辨榮
○講話	辨榮 上人
○詞藻	筑前坊
○華音の聲	中川 弘道
○雜錄	中川 弘道
佳好人、猿の常盤山……	

## ◎佛子の自覺

山崎 辨榮



如來は吾等衆生の本體の大みおやで在ますことを信じられた時には隨つて吾等は眞に之れ佛の子である云ふ自覺が生ずる譯である。併し唯、佛典に一切衆生は悉く佛性を有すとの文を讀まばかりては佛子の自覺とは云へぬ、全く精神の奥底に伏在せる靈性がみおやの光明に喚發されて恰も卵の卵子が醒める時と同様に殼の中より開裂して雛子と現れた時に初め我は佛子であるとの自覺が生ずる。我等は佛の子であると同様に人の子である有ゆる罪惡の種子を悉く持てる、

動物性の煩惱を皆持てる、我等の動物性は犬や馬の如くに唯本能的に素朴に正直に犬は犬、馬は馬として本能とは違つて我等は知識が發達して居るに非常に狡猾なる最も醜惡なる行爲を爲す處の動物である。之を儒教には人欲の性と云つて居る、此の人欲の性と云ふものは實に自分勝手なもので各自が自分の日々に起り來る心の云何を返照したならば如何に自分でいきの目で視ても到底善良のものとは思はれません、人間は悪い方へ發達して居る才また善い方へも働かすれば如何なる善事も爲し得るのである、是は人の子たる動物性を有して居ると同時に法身より受け得た佛性即ち靈性を併せ持つて居るからである、併しながら倫理の講義を聞いた位では心の奥底に伏在して居る靈性は開發すべきものではない、眞にみおやをみおやと信じてみおやの靈光に接觸し靈力に同化するに依り初めて佛子の自覺も出來、靈性の開發もなし得らぬのである。寔に佛陀出世の本懐もここににあるのである、然らば我等は如何にして此の自覺に入ることが出来る

— ( 2 ) —

かとなれば是に就て二方面から親子の道がつかうと思ふ、一面は聖道的即ち法華經に如來は一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふ、其の一大事因縁とは即ち人々本具の佛知見を開きて佛の正道に入らしむることである、換言すれば各自の奥底にある佛性を開きて佛子の自覺を興んが爲に佛に世に出現せられたと云ふ、又、梵網經には人の佛性を開きて佛子の性徳を働かせんには佛の憲法に基きて父の家督を相続させんとする意に於て説き明されてある、經に衆生佛戒を受ければ即ち諸佛の位に入る位大體に同ふし己りぬれば眞に是れ諸佛の子なりと玆には全く父の憲法に基づけば家督を相続させると云ふ意味である、前の兩法共に道理の上には子として父の相続は出来易いやうなれども動もずれば唯理論の上のみ我は佛子なり否、我已に佛なりといかにも自覺に達したる如くに云ふけれども事實は却々許し難い、故に一方の宗教方面よりすれば、事實の上には遠く入り易い、其は如來は慈悲深き母としての恩寵を以て子たる吾々の靈性を發育して頂くと云

ぶべきものなき如く凡夫の汚き心よりも善き佛の心が生ずるのである、實に希有である即ち如來を念ずるが故に能念の心も佛となる、世に是程善き靈なる人はない、されば心の聖き聖者觀世音大勢至共に我が友達として愛し給ふ、己に如來の子と生れたのである故に願て諸佛と同じく無上正覺を得べしとの意である、然らば佛子としての自覺のみでなく其の内容に於て最も親子との親密なる血が通つて居る、善導は念佛者と如來との間には凡てより親密なる愛と最も近き縁と又、強き力を以て固く結んで離れぬ關係を爲して居ると明されてある、斯くの如きの縁を以て佛子の自覺と共に親子の親密なる愛を以て繋ぐことを得る内容までも佛子となり得られるのである。

## ◎光明

この光明は我等衆生の靈性を復活し靈に活かす處のみおやの靈力にて恰も太陽の光に依り我等が肉體の生命の活かざる如く光明とは衆生の信仰に對するみおや

ふ意味を以て親子の自覺に入るからである。又云何にして慈悲の恩寵を被むるか云へば如來は慈悲のみおやと聞き、みおやは我等衆生の迷子の慈母南無阿彌陀佛と我が名を呼び我れを頼めと恰も初めて産れし兒が未だ母の面だに見ることは出来ぬけれども唯啼く聲を便りに乳房を嘔ましむるやうに我等が未だ如來の慈悲の温頭は胸えぬけれども只々みおやの慈しさに一向御名を呼ぶ時は漸々に信心增長して縱令尊田を拜ひには至らざるも願てみおやに親みて現に此に在ますことを信ずることを得。經に如來の威神功徳を開えて日夜に稱念して至心不斷なれば、光明に遭ふことを得て三垢消滅し歡喜踊躍して善心生ず。また觀經には若し念佛するものは當に知るべし此人は是れ人中の白蓮華である觀世音大勢至其の勝友となる當に佛の位に座すべきなり故いかにとなれば如來の御子と生れたからである此の意は若し眞にみおやを憶念して離れざるものは身は人間にありても其心神は清き佛子である、白蓮華は淤泥の中より出でても其の潔白なること世に比

の恩寵にて一大靈力とも不可思議功徳とも名けらる、如來の光明は眼には見えぬけれども一心に念佛する時は其光明に觸れ自然と心が一變して苦を抜き樂を興え惡心を轉じて善心となり迷を除きて悟を得せしむ等の不思議の功徳が備つて居る唯は太陽の光り地地球上有ゆる生物の生命より一切のもの悉く其光りを被らずして活けることは出来ぬ、地上の萬物が太陽の力を離れては凡ての働きを失ふが如く人の精神は大みおやより受けたる不思議の靈能を有てるもの、更にみおやの恩寵を被りて聖意に契ふやうに働きて人生の天命を全ふし使命を果すことを得るは如來の光明を享くが故である。故にみおやの光明は實に無量無邊の種々の方面に互りに照す徳用である、要を取て云はば一切の諸佛聖賢の有ゆる心の働きはみおやの光明に照さるゝに依る、恰も萬物が太陽の光に依るが如し、種々の方面に互れる、光明を、詳かに十二光に依り説明せば明かに其の不可思議の徳あることが信知されるのである、其は追々に説くことにして今は如來の光明と太

— ( 4 ) —

— ( 3 ) —



陽の光りに比して、三方面より光明の作用の説明したいと思ふ。通じて太陽の光と云ふも物理學には光線と熱と化學線との三つの能力に分ける如く、如來の光明も其に例して三種に分けて智慧と慈悲と威神とを以て其作用を説明せん。一、智慧光を太陽の明線に比すれば、太陽の明線は肉眼に見ゆる山河大地一切の動物植物に至るまで明かに見ゆる如く、如來の智慧光は一切衆生の智力を照らして萬物の真理を明かに知らせる作用に萬物には何一つとして理の具はらぬはない、けれども人智慧がないから解らぬのである。有爲無爲と申して有爲とは此の世間の理科學にて研究して居る物理や生理植物杯の凡ての理を明かに知るを有爲の智慧と云ふ、佛敎で云ふ諸佛菩薩等の理想世界の玄深の真理を悟るを無爲と名く。有爲無爲一切の真理を照らすのが智慧光なれども今は宗教の必要なる我等が信仰上の真理を覺らして下さる方を主とす、一心に念佛して光明に遇ふ時は縱令學問なき人にてても自然と能く佛智に相應する智慧が開かれて正見となり、世

間門には善惡因果の理を信じ進んで佛智不思議の理に於て疑はず、其の信解する處が大徹徹底した人と同一に歸する如く是れみよの智慧光に照らさるゝからである。世間の學問ある人は絶對の真理を相對的人間の智慧を以て解せんとするから違つて誤謬に陥り易い、正直に一向に知識の教を信じて一心に念佛して如來の光明に自己の靈性が照らされて信心の眼を開く時は自然と佛智に相應して甚深の真理も自ら解せらるゝに至る。

光りに照らさるゝ範圍は甚だ廣く六百卷の如きも智慧光に照らされたる真理の説明に過ぬ、此事は漸次に説明せん。

二、慈悲と太陽の熱線、太陽は明かると共に熱い熱を放つて地上の萬物を暖ため有る生物を活して居る如來の慈悲は溫暖なる靈力を以て衆生の心靈を溫暖ため活かして居る、慈悲と云ふものは溫暖なる心の作用である、世間には慈悲も同情もなき者を冷酷な人と云ふ慈悲心とは人の苦を我が苦とし人に樂を與ふるを己が

て人間の心と氣と固めて居る、之れが抑も人間の弱點である。然し此の惡質があるから如來の恩寵を仰ぐ必要も感ずるのである、凭る人間の苦味も滋味も如來の光明に遇ふ時は何時か心の滋味が脱けて最も實すべき甘味と變はる。惡にも強き善にも強く煩惱が善提となりて人格も一變して聖き人となる、如來光明中にありて得意を己が心とし清き正しき生活がなし得られる様になる。是又、理窟でなく一心に念佛して光明に接する時は惡を廢して善に進み邪を捨て正に歸し人生を價値ある光榮ある人となし給ふ。

願はくば諸士よ大みよの光明は天地に充滿す、一心に念佛して靈光に接せよ初めて人生の眞意義を覺ることを得ん。

### ◎光明生活

敬祖釋尊が此世に御出まされた慈悲は、一切衆生みよの光りを照らす無明の闇に彷徨つて何れより生じ何れに歸趨すべきやを總らす目的に生活して居る

は實に憐愍の極みである、斯る衆生をして如來の實在を總らしめ秩序ある意義ある有終の美ある光明生活を導かん爲めである。然るに世間五惡五痛五燒の眞實の衆生を教化して五惡を捨て五痛を去り五燒を離れしめて正と善との光明生活に復活せしむるには、實に容易なことでない、けれども世尊は懇ろに衆生に五惡五痛の人生の暗黒面を認めさせ御まで永遠の光明に導き給ふことに奮勵努力されたのである。

精神生活に二類あり、一の衆生はみよの光明に遇はず人生を暗黒の理に非り去るものは實に凭る族は人間として罪惡のみでなく天心に逆ひ人道に戻る眞實抵抗にして難化の類である。彼等は肉欲我欲の奴隷として精神が現在より永遠の苦境に墮落する族である。經に「惡人は惡を行つて苦より苦に入り冥きより冥きに入り」とは此類である。又、一面敬祖の敎に基つたおの光明に活きる者は常にみよと共にありて聖意を我が意とし、意義あり價値ある生活をなし今日一日の勤めは永遠の基礎となることを信じ永しへに希望の

相を現して光明生活の模範を示しなされた、暫く經の文を以て彌陀の光明に充かれたる敬祖の相狀を明さん、爾時に世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顔巍巍たり、時に弟子の阿難尊者が此の靈相を瞻て長跪合掌して御問申上た、今日世尊の諸根悅豫し姿色清淨にして光顔巍巍たること明淨なる鏡の影が表裏に轉るが如し威容顯耀にして超越し給ふこと無量なり未だ曾て殊妙なること今如くなるを觀上らざりきと。

敬祖が此經を説かんとして序分に此の相狀を現しなされたのは深き意義あり、其の所以は是より顯示する教に依りて彌陀の光明を被りて心靈復活する時は、心が彌陀の慈悲に充され靈妙なる感應に依り身心全體が彌陀の靈徳に充かるゝ故に眼耳鼻根より乃至身の全體が彌陀の靈徳の容物となり法喜と禮悦に盈ち溢れて内部に充かるゝのが悅豫の相と現はるのである。また彌陀の光明に反映したる徳が姿色清淨の相と現はるゝ彌陀の威神が精神統一の方となつて引き締まつて來るから光顔巍巍と現れ威容顯耀は、之が敬祖世尊が

光りは前途に輝き現存を通じて永遠の樂土に安住する者である。此等は失敗の内にも成功の秘密を發見し、苦境の究りに樂土を見出し艱難に遇はれ己れを研く石と意得困苦に對しては人格を鍛錬するの器となすの如き光明の前には一切の事業として悉く佛道ならざるはない、彌陀に「善人は善を行つて樂より樂に入り明きより明きに入る」とは斯る生活の類を云ふ。是れ人生が永く光明と暗黒との何れかに岐るゝ分岐點である。

敬祖は凡ての人間が樂汚と苦惱と無知を非難とに覆はれて堅く業に結び付けられるを恐れみ斯る覆を救済せんには獨りみよの慈悲の光りに溫暖られて救はるゝ外に道なきを覺り給ひ、善經に懇ろに斯る罪惡の凡夫をしてみよの光明に依つて心靈復活して光明の生活に入るは無上の光榮なることを御示しなされた。

無量壽經は敬祖釋尊が大宗敎家とし宗教の眞面目を顯示されし經典である、去れば此經を説かんゝする會上に於て先づ釋尊自ら彌陀の光明に充滿された身心の

我等衆生みよの光明を被れば器の大小に依らず其の分相應に被りたる光明を以て生活々動の上に現すことが出来るとの人格的模範を示しなされたのである。

尙更に敬祖は御心に彌陀の靈徳に充されたる内容の狀をば五徳を以て表示されてある。光明生活の事に於ては號を追て述ること、此に省略します。

楞伽經に曰く  
十方佛刹中の衆生菩薩等あらゆる法報應身及び變化身皆無量壽極樂界中より出す。

往生論註に曰く  
諸佛菩薩に二種の法身あり、一者法性法身二者方便法身なり、法性法身に由て方便法身を生じ方便法身に由て亦法性法身を出す。此の二種の法身は異にして分つべからず、一にして同すべからず、是の故に廣略相入統るに法の名を以てす。菩薩若し廣略相入を知らざれば則ち自利々他する能はず。

○みおやと共(に)

筑前坊

世間の謠に「旅は道づれ世は情渡る世間に鬼はなし」と云ひますが...

と心は肉慾の奉公忠勤に夜もろくく寝もやらす思煩らひそれからそれと貪欲...

如来の聖意に依て養ひ育てられたもので即ち如来恩寵の然らしむるものである。

一人来て二人で歸るうれしさよ 阿彌陀佛を道づれにして 然るに若し我等如来を知らず...

鬼や蛇をかくまい置て何にする 南無阿彌陀佛と云ふてせめ出せ 人を傷ける様な邪見な剣を懐く時は...

氣付た時直に一心稱名する外はない、然らば昨日迄鬼の住みにし胸臆も...

我がものとして 奥村辨誠 何ものでも、これを探つて自分のものせなければ...

詞藻 月に寄する七覺支 擇法覺支 月のかたにぞあくがれにける...

なものであるが、何時までも背負つて居て食へることが出来なければ何んの價値もない...

捨覺支 心にかゝる浮雲もなし 念覺支 月のひかりの映らぬはなし...

捨覺支 心にかゝる浮雲もなし 念覺支 月のひかりの映らぬはなし...





第一巻 第三號

新紀の祝禱

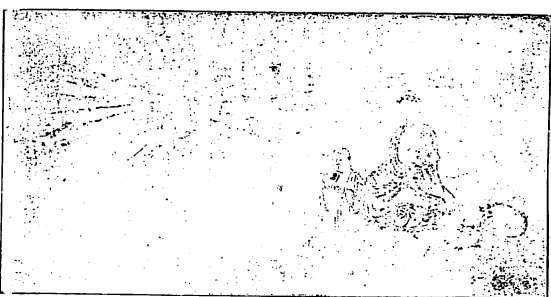
大みおの清き光の裡に新らしき年を迎ひたる我等同胞は、無量壽のいと目出度き聖名をたゝえて祝し奉る。如來の聖龍を被り、みおの光明に活ける我等は新たに改まりたる元日より此の年を盡してみおの聖旨に契まらう、又みおの光榮を現すべく勤め得らるやうに加倍力を仰ぎ奉る。

惟かに舊き太古の昔より新しく朝な夕な目出度し世にすべての物の中に、最と古き太陽は毎朝新らしく東の天に生れ出づる太陽は新らしき光を浴びかけ、地上の萬物は何時も新らしく生るゝことを得る。絕對界の如來の光明は太陽よりは猶、舊き久遠塵垢の過去際より昔より十方法界を照して念するもの、心靈を新らしく生れさせて居る。倍て太陽によりて活かざる、地上の人類は塵埃の時代より開明に進むに随つて人為的の燈光は行燈よりランプ、ランプより電燈と云ふやうに漸次に進み来た、然れども太陽の光は萬代に易らぬ。心靈上の光明に於て人為的の傳道法や説明などは時機に依て必ずしも同一でない、然れども人の心靈を照す太陽の光は昔も今も同じ南無阿彌陀佛の光明である。舊き南無阿彌陀佛の日光の外に一切衆生の心靈を新らしく生れさせる法はない。

視給へみおの清淨と歡喜と智慧と不斷との光明は一切萬物の中に表現されて居る。天、新鮮なる清き影影は清淨光の表れにて蒼海の潮に面を洗ひながら昇る旭の如くなる笑顔はいかにも歡喜光を現はして居る。口東天に昇りて普ねく乾坤を照し萬物焔然と現はるゝは是れ智慧光の表れである。陽威赫赫として一切萬物に活力を施すは是れ不斷光の表現と云はん。萬物の中にみおの光明は加はらざるものなし、實に稱讃すべき哉、宇宙に萬物の設備を以て我等同胞を恵み給ふ、みおの聖意は我等同胞の心靈を活かし永遠の生命とし、みおの全まか如かしめんとの聖意なりと悟す。我等は新たに興へられたる年月日時を重んじ、聖意に契ふ移めを以て聖龍に報ひ奉らん、こゝに謹んで新紀を祝禱すること如きは、

新年號目次

新紀の祝禱	山崎 辨榮
三精五徳の聖龍	上入
我等が師なるものみおの清き光	弘道
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛
我等の新年の聖旨	佛



◎我等が師なる教のみおや

辨榮上人

○彌陀の分身なる教祖

謹んで一大事無量壽の意を案するに我等が教祖釋尊の御本體は清き上界に在り所法無量壽佛である、上界に在るは彌陀光王、地上に分身して釋迦牟尼佛、彌陀尊は宇宙最高の中に在りて光明普照く十方世界を照します。大日輪である、猶太太陽は自分より分出したる地球に對して永遠に光明を興えて萬物を生長するが如く淨界の彌陀尊は御自身より地上に分身したる釋尊に當りて光明を注ぎて清く人格を光として地上の一切衆生を教化し給ふ、若し淨界に彌陀なかりせば地上に釋尊で人格の光明者出づべきなく釋迦は人格を以て彌陀の光明を現し給ふ聖者なるべし、若し釋迦尊の光明的人格を以て彌陀を現すにあらざれば此の地上の衆生に淨界の大明尊の在りますことを證明せしむ

阿彌陀に世尊根根根に満る姿色の清らかに光顔の満る御相を尊者阿彌陀は佛の聖旨を承けて應より起し右の肩を脱ぎて瞻き合せて佛に申上げた、今日世尊は御身の悅豫に満り姿色の清らけく光顔の満るに超て比なく未だ會て是の如き殊妙なるを瞻觀せらざりき。然り世尊よ今日世尊は奇特の法に在り、今日世尊は諸佛の所住に在り、今日世尊は諸佛の道に在り、今日世尊は佛の行に在り、過去未來現在一切の諸佛は相念じ給ふ、世尊も亦諸佛を念じ給ふ、阿彌陀の威徳の光々に於て此の間をなせしめしや自ら慈恩を以て斯く問ふや阿彌陀に言はく諸天が來つて我に敬ゆるにあらざりしかる所に従つて此衆を開奉るのみ、佛の給はく善哉阿彌陀問ふ所甚だかし、深き智慧を發して諸佛の排才あり衆生を慈念み給ふが故に此の慈恩を開へり、如來は無量の大徳を以て三界を莊嚴し給ふ所以に世に出興て光く道教を開き眞實の利を以て群萌を拯む是れ無量劫にも値ひ難く見難く一切の衆生の時ありて出づるが如し今問へる衆は世を饒益する所多く一切の衆生を開化し、阿彌陀に當りては其身根根にして雙指せず姿色永へに脱はしはく光顔の壽命を住し給ふ、身根根にして雙指せず姿色永へに脱はしはく法に自在なればなり。阿彌陀に當りては其身根根にして雙指せず姿色永へに脱はしはく

ることが出來ぬ。

釋尊が地上に出て給ふ所以は偈にみおの實在を示し其の大明尊の下に一切を攝取して永遠の光明に活かしむるためである、我等衆生は元、法身のみおより受たる靈性を有て居るけれども擲取のみおの光明に觸れざれば靈に復活すること能はず、若し人彌陀の光明を被る時は從來の人の子としての無明罪惡より靈に復活して光明の中の人となし得る。

教祖釋尊は大哲人であると共に大宗教家である、大哲人としての釋尊は聖道門の教主である、今此の諸經は釋尊が大宗教家として我等衆生の爲に自ら信仰の模範を示し、實に此の三精五徳は光明生活の身と心とに具すべき靈徳である、若し我等如來の光明に依て此の靈

徳備はらざれば自己の染汚と罪惡を以て人生を徒らして永く開黒の獄火に焼かるゝの外道なきものを何の幸ぞや釋尊の教に依りみおやの光明に遇ふことを得たる、彌陀釋迦二尊の恩徳を深く感謝して粉骨碎身以て報謝せざるを得ぬ。

○彌陀の心光に満されたる教祖  
我等が教祖釋尊は彌陀の光明に満され又如来の聖意に満されなされた尊體にて何人にも如来の光明に満されれば大小はあれども凭やうな人格となり得らざるの模範を吾等衆生に御示しなされた、吾人は釋尊の序分に釋尊が自ら彌陀の光明を得給ひ彌陀の聖意を御受て爲させられ身に其相を現はしなされたことを演たいと思ふ。

譬へば西に日は入るも 光りは月に映る如く  
彌陀光王の日光は 在尼滿月に輝けり  
此頌の意は彌陀の光明受たる釋尊の御相を演べたのである、例へば中秋の清宵に東天に皎々として昇りたる満月の光に輝くのは其光りの本は此の地球からは見えぬ

に彌陀の日光に盈滿せる御人格である。釋尊が幼時悉多太子として王宮に在ませし時人生問題の爲に深く憂鬱し煩悶なされてありし時と後に正覺を成じて彌陀の光明に充され六根常に悦豫し光顔永へに麗しく在ますやうに爲りての精神生活を比較せばいかに彌陀の光明は人の精神に對して偉大なる靈力を興ふるかな自ら知らるゝであらう。

○宮中の太子と光明中の釋尊  
今此の聖經に現れたる釋尊の御相を窺ひ奉れば御身は娑婆に在りながら神は清き光明中に在ること明かである。斯の如きの世尊も未だ彌陀の光明を得ず王宮にありて太子たりし時、生死問題の爲に非常に煩悶し深く出家の志しを起し給ふ、父王の思ふに太子出家の志を奪ふは只太子をして世の快樂を興へるの外なしとし王は太子の爲に有ゆる娛樂を興んが爲め或は三時殿を建て四時の快樂に飽かしめんとし又國中より有ゆる美姫を撰び采女として常に侍せしめ歌舞管絃を以て太子を眩暈せしめんとし一國の富貴力を竭して太子

西に入りたる日の光りが月に映るので夫で清らかに照して居るのである、夫の如くに釋尊の御相の如何にも清く麗しきは神人の徳を以て日月の光りさういふ際際する程の立派な御人格として現れたるもの、其源は凡夫の肉眼では視ること出来ぬ上界に在して威神と慈悲の光に映らして宛かに照し給ふ彌陀如来の御徳の光給ふたのである。宗教の眞體中心はこゝに最も意義あることにて若し人彌陀の光明に靈化せらるゝ時は其分も此の光明に依て復活せよ是れ釋尊が世に出で衆生教化の本懐はこゝにある。釋尊が淨界に彌陀の日光に映寫したる六根清らかに光顔麗しき御相を現れ給ひ、御胸の内容は彌陀の慈悲に盈滿せられ威神に靈化せられて神人の活動を爲され給ふ。御相の上に諸根悦豫、姿色清淨、光顔麗々々の三通りの御相は全く上界の彌陀の光明の映寫したるので太陽の光りに反映したり満月の如くである。釋尊は初めて正覺を成じてより永しへ

の志を奪ひ出家の御を止めんとされた、又太子十七歳の時善美王の女郎歌多羅を聘して妃と爲し又、美姫共の歌舞管絃は長夜の宴を殿内に演奏せり、實に天上の樂土を地上に移して太子の志を奪はんとす、如何なる色味の快樂も太子の人生問題の煩悶は取除くこと出来ぬ。凡夫の最も光榮とする物質上の幸福を以ては太子の心靈上の望を満足せしむることは出来なかつた深窓に在ていかなる娛樂も亦、樂しみとは思はれぬ如何なる美味も甘いと思召さぬ只、生死のために心を煩はし神を憐れ憂慮掛くことが出来ぬ、祇給ひ普通の人の幸福は太子の爲には何の價値もない、然して梵の如きの太子が一度家を出て遊を修め遂に六年の後に正覺を成じて即ち彌陀光明中の人となり給ふては上界の彌陀と地上の釋尊との融合せる御心情、我れ彌陀に入り彌陀に入りて彌陀の靈光に融合したる釋尊の心は恰も明かに輝きたる明鏡に日光が反映せし如く彌陀の光明に復活したる釋尊の精神は昔、太子の時とは一變し最も麗しき圓滿なる光輝ある人格となり給ふた。

釋尊の御心は彌陀の大慈悲に満され有ゆる妙樂中の最妙樂なる自受法樂を受け給ふ。其の彌陀の靈に満されたる所に六根は悅豫に満ち自ら姿色清らかに光顔麗々とした相を現はされた。

釋尊の靈妙の法樂靈感極まりなく、歡天喜地、八面玲瓏全く釋尊の光明の反映といかにして知ることを得たかとなれば總に明かされてある世尊は彌陀に充された御相と彌陀に現はれ又其の内容の相を世の人々に知しめて而して世の人々にも彌陀の光明を求め其の靈感を得べきやうに、志を起さしめん爲に御弟子の阿難尊者に由て釋尊の御相に麗しきを現はれたるに深き思召あることを云はしめて阿難が世尊に申したる、あ、世尊よ今日世尊を見上げ奉れば御眼や御耳を初め全體に於て御悦びに滿され御姿色の玲瓏として清淨皎潔にして又、み顔の威嚴は麗くいかにも麗しく清らかに威相の嚴めしきは實に明淨なる鏡の光りが表裏に透明する如くに在ります、是れは我曹の窺ひ知ることの出来ぬ因縁の存在すること存じます、(一)が即ち釋

を念誦して、道友諸彦の御光榮を祝し奉る。之の祈らざりし機會に於て聊か私の年頃の所感を陳べさせて頂きたい。

人生は僅か五十年其半ば已上の三十七年を無意義に過した私は爰に、聖者山崎上人の御指導を蒙るの良縁を得て始めて人生に生き甲斐を見出すことを得ました、其の光榮はさうしては居られませぬ。

こうした尊き御導きの手に接すること無くして之の年月を過ごしましたら遂に之の受け難い人生を果敢なく無意義に終らねばならぬ筈でありました。

唯眼前の物質慾にのみ没頭して、利に走り名に溺れて果てしなく悶へて居る人の多き世の中に、私は何と云ふ幸福な身の上でしょう、吾れは單なる吾れで無くても幸ひ大御親の思ひ子であつたことに御付かせて頂いた私は何だか夢から醒めたやうに、定かならねども之の清紙の向ふには慈念大悲の御親の在りて常恒不斷に慈光を垂れさせ玉ふ恩寵の尊きを感じ得る身となりました事は何たる幸福でありましようか、宗祖が乘縁具足

の身傍の中の脱なりとの法悦の眞味を初めて直覺的に味ふことが出来ました、過去幾十年の孤獨の生が、無意味、虚偽、暗黒の生活、今から考へますと實に耻かしさに堪へませぬ、教壇に立ち十有七年空手の他何物も有せず、おこがましきも布教師など大きな顔して鐵面皮にも蓄音機式に叫んで居た事、そも何でありしかを思へば實に慚愧に堪へませぬ、之の無慚無愧の迷夢に一大鐵錘を下し辱まさせて下さつたのは、辨榮聖人でありました、いでや之れより益々深く御法の深山に分け入りて輝く如來の靈光に觸れ靈格完成の期に近かひかな、之れやがて如來の聖意に副ひ奉ると共に廣大なる恩師の御恵みに仰ゆる道であらう。

道の友なる幾多の士女よ、俱に共に聖道に同じ念佛の手を携へて進み、莊嚴微妙の花園に逍遙しやうではありませむか、限りある行數超海之にて擲筆しやう。

大正九年の新しい靈光を迎へ、謹んで無量壽佛の寶號

### ◎年頭所感

福岡 中川 弘道

大正九年の新しい靈光を迎へ、謹んで無量壽佛の寶號

# 慈光の許に新年を迎ひて

中村 禪定

歡びの光りに逢はばこそはに  
 のどけき春の心地こそすれ (辨榮上人)  
 全宇宙に最も尊き只、み獨りの如來の許に正しき智慧と温き慈愛との光明に照されつゝ、茲に悦びと希望とに満ちた目出度き新年を迎ふことを得た吾人念佛信者程に幸福なるものはなからうと思へます。  
 若し此の竹きみおの實在が信じられず、此のありがたきみおの光明が認められなかつたならば何に依つて精神的慰安を求め、無限の樂しみを得られませうか。此の慰安この悦びばかりは金錢を以て買ふことも出来ぬれば智慧を以て案出することも出来ませぬ。若し金や智慧で求め得るものならば世に富豪貴族や智識階級の人、何の苦痛も煩悶もなく愉快に世を渡るやであるのに、世は之に反して貧賤や智識階級の人ばかりが精神的苦痛や煩悶が多いやうに見えら

樂しみ、無いものは無くて安心し何時ものどけき春の心地して清く正しき生活し得るものは念佛信者の光明生活でありませう。  
 汚れた心も如來の清淨光に照さるれば心の垢も洗ひ清めて下さる、歡喜光に照さるれば心の惱みも打消して悦びの心に入れ替へて下さる、智慧光に照されては愚痴の闇も破つて下さる、慈愍の心も不斷光に照されては勇猛清進の脚を興て下さる。例へば日光に照され且つ温められて萬物の生育するが如く、みおの光明に照されて初めて吾人は精神的に更生し以て永遠の生命を得ることが出来ます。上人の御歌にも  
 天地も皆みおの御光の中なれば、みおの外に住家やはある。○全宇宙に最も尊きみ獨りの大御親に在ます無量壽佛は天地廣大なる設備を以て吾等を生かし且つ恵んで下さる、其の正しき智慧に照され、其の温かき慈光に恵まれて生き働きつゝある吾人念佛信者は願くばみおの聖旨に契ひ、光榮ある生活々々を續けつゝ、現在を通じて未來永遠にみおのみ子として仕へ奉らん

れる大經に曰く、田あるものは田を憂ひ宅あるものは宅を憂ひ牛馬六畜奴婢財食什物又ともに之を憂ふ。○然らば無いものは安心かと云へば然らず、同經に曰く、貧窮下劣は困乏にして當になし、田なければ又憂ひて田あらんことを欲し、宅なければ又憂ひて宅あらんことを欲し、牛馬六畜奴婢財食什物無ければ又憂ひて之あらんことを欲す。○とあるものはあつて心配し無いものは無くて心を憫まし、安き時あることなし、佛は之を三界火宅と仰られた。  
 然るに一度信仰に目覺めて見れば十方法界は彌陀の懷ろ、大慈の光明中に生活をさして頂いて居るのである。攝取不捨の光明は念ずる所を照すなり、佛は今現に茲に在りて我身を護り我が心を照し給ふが故に、水ある處には必ず月影の宿るが如く、信仰の水さいあれば必ず如來の靈應身は其處に現じ給ふ吾人念佛信者は立居起き臥し佛と共にあるのである、佛の在す處は極樂である、去れば佛と共にある吾人念佛信者の生活は其儘が極樂の生活でありますまいか、有るものは有つて

ことを祝願し奉る。  
 願くば世の同胞諸兄弟と共に  
 如來清淨光明に、心の垢を洗はれて、清きさきわひ營まむ。  
 如來歡喜の光明に、心の惱みもうら融けて、安も月日を送らなむ。  
 如來智慧の光明に、心の闇を照されて、正しき道をたどり進まむ。  
 如來不斷の光明に、懈怠の心に鞭うたれ、勇猛に勤め賜まむ。  
 皇紀二千五百八十年  
 大正九庚申元旦

## 詞藻

辨榮上人

ゆく末も今もこのまゝ、南無彌陀、佛と共に永恒のいのちぞ。  
 願くば世の同胞諸兄弟と共に  
 如來清淨光明に、心の垢を洗はれて、清きさきわひ營まむ。  
 如來歡喜の光明に、心の惱みもうら融けて、安も月日を送らなむ。  
 如來智慧の光明に、心の闇を照されて、正しき道をたどり進まむ。  
 如來不斷の光明に、懈怠の心に鞭うたれ、勇猛に勤め賜まむ。

○  
 佛の身のちからしなくばいかにして、あかねさす日の光りやあらむ。  
 今はやた疑ふやみもはれにけり、永恆の光りのなかに住せば。  
 水すまばかならず月はやさるなり、なごみ佛を疑ひやする。  
 ほとけとは九界にかゝる雲はれて、永遠にかいやく心なりけり。  
 麗はしき入日かやくさまばかり、さよきみ國のたぐひなるらむ。  
 むらさきに匂ふ入日のさまなくば、何にたごえんさよさみ國を。  
 永しに照るみかりの中ながら、知らぬは已がみみぞありけり。

○  
 十界を知らまほしくば一心の、さまぐなるをあげて見よかし。  
 聖戀  
 奥村妙々子  
 笛吹きて木蔭に立てば  
 やるせなき思ひ抱きて木蔭にたてば  
 オ、そこに高く呼びける父のこゑ  
 き、とりてしかわが子らよ  
 麗はしき月のかんばせ見せしより  
 なをまさりけりなわが戀は  
 わが戀は人世のそれとちがはかり  
 鳴かぬからすのいと戀しき  
 暮ひつる心のまゝにみほどけの  
 ふ委われに示させたまへ  
 相模權神戀はしき夕日哉

○  
 青田 照室  
 ひんがしの空ほのかにも匂ひそめ、朝日かけ待つわがこゝろかな。  
 ほど、さす血を吐く聲と知りもせて、あだに聞きつる昨日をばつがし。  
 つきせざる泉もあるを掬まずして、湧ける人ぞ我身なりける。  
 泣きなげく涙の露にうるほひて、心の花は咲きいづるむら。  
 小さな花名もなき草も天地の、とはのいのちに生きてありけり。  
 朝日かけ照りそよきわみ塵もなし、はれての朝の雲のわがやき。  
 天地もは、えみませる心地して、こゝろさやけき雪はれの朝。  
 けさ見れば物みななべて輝きぬ、聖き淨國に生れ來しかも。  
 白たへに匂へる雪よこゝろあらば、けがれし我をきよめ給へよ。

○  
 質義 應答欄  
 光明主義に就て  
 山崎 辨榮  
 みおの光に清められたる中川上人よ、吾人が主張する光明主義の御質義に對して安心の大意を演べて主義を明かにせんとす。信條の三條件を明せば、一、所求、二、所歸、三、方法、  
 一、所求とは、信仰の要求する所はみおの光を得て光明の生活に入るを目的とす。光明を被る時は從來の盲目的生活より覺醒して、みおの光明中の人となり、現在を通じて永遠の光明に入ることを得る。人の天性は六根は染汚にて感情は苦惱である、智は無明にて意志は罪惡である。我等か生れつき有て居る弱點は自分の力にて除くことが出来ぬ、唯、みおの清淨と歡喜と智慧と不斷との光明の靈化を

被りて光明の中の人となることを得る。光明の中にも肉體ある間は精神的に光明中に生活し命終る時は現時的に光明士の人となり得る即ち淨土に生るゝことである。

二、所謂の本尊、彌陀尊は絶対的の中心本尊に在りて現在未來を通じて唯一のみおやに在せば無量無碍の光明を照して念佛の衆生を攝取し給ふ。我等が肉體は太陽の光にて活かされたる如く、我等が心盤は彌陀の光明に依りて活かされてある。如來は見え不見に係らず真正面に在すことを信じて其照鑑の下に精神指導されつゝあることを信すべきである。是の如くに歸命する本尊を確信すべきなり。

三、去行の方法は如何なる方法を以てみおやの聖意に仰へ光明の中に攝めらるゝかとなれば只本願の名號を稱へ即ち念佛三昧を以てす。如來の慈悲心は我等が心に入り、我等が信念の心は如來の中に入り、見と不見とに係らず一心に念佛して如來の慈悲に同化せられんことを要す。常に如來の中に在り光

一、佛陀は犧牲的精神の最大なるものなり、吾人も佛心を開發して小我を離れて大我たる佛陀に投入し、宇宙全體を我となし、衆生萬物の爲めに働き犠牲たる可き願念起るに至らば自己の生死を超越する事を得可し、之の意義を生死解脱と解して可なりや、

二、單に現身より死後永遠の生命を得る、即ち肉體の生涯を絶し心盤は長へに生死無く輪廻轉生無き意義を指すや、

三、無量壽佛を仰信することによりて眼中生死無く肉の死に臨みては容たり得る覺悟の定まれる心理態を指すや、

四、罪惡凡夫の救はるゝ意義に付て、

五、罪惡下劣の體も念佛することによりて如來の光輝を蒙り三垢消滅して善人化するの意義なりや、

六、たとひ常に念佛しても罪惡遠ざかり行を改むること能はざれば救はれるとは云へざるや云何に、

七、常に念佛する人にして事實罪を離れ得ざる吾人は三垢消滅の利益を疑はざるを得ず、たとひ善人化せ

明の生活を得、肉體終れば報土に生ずることを得、要する所、光明王を本尊とし、光明名號を稱へ、光明中に生活するを宗趣とす、尙號を追て明すべし。

### 質疑一束

福岡 中川弘道

左記數項の質疑、道友某工學士より寄せられたれば、山崎上人の御解答を仰ぎ一般信徒の啓蒙の一助にも、

一、永遠の生命の意義に付て

一、吾人の意思が行為に現はれし結果、一波萬波式に時間的永遠に波及するを云ふなるか、

二、大自然法則の生命は無限なり、吾人は其一部分なるが故に全部と共に無限に持續するを指すや、

三、吾人の肉體は定命により離散すとも、先天具有の靈性は無始無終なるが故に相と處とを異にすとも永久に存在するを云ふなるか、

二、生死を解脱するの意義に付て

### 信者の聲

井上 陸 森

私僧は本年四拾四歳の餘と置ねましたが、願へば思ふ程漸く萬、元祖様より絶望の刑にぞもせられやせんか、嗚呼がましく生きて居るを、體を壊るべき身でありし、兩眼に別れて涙は出ても自己の反省には未だ遠かりし、愚問に承蒙しても左程強き道念も起らざりし。今より廿二歳、北清野の、虚受信應の罪咎を幾分でも洗除せんとて、本を荷負ひ乞食主となつて、廣島縣下に行脚念佛を修した事もあつたが、其時は名欲が伴つて居つた、爾來タトト、でも坊さん流であらうとも確かな信念に住したいものと苦しみ悩んだこと十有餘年、此間の讀經も念佛も先づ赤裸々に告白

せば衣食の爲の讀經や念佛であつた。眞宗の傑僧と唱された藤原老忠に聞て置きしこと、堀尾大僧正や千葉良典僧正より承りし事どもが年經るまゝに味が出で、六時禮讃の中に包めらる妙趣、三經一論等の深味が、ボツ／＼と自分自身の本眞物になり初めし頃、佛は私を救ふのみならず、九州巡遊の初め、山崎上人の尊き法界に謁し、廿餘年の感懐忽ち解け、宇宙法界に現れし給ふ絶對なる靈光に近く、捷徑の指示を蒙り、生れてから初めての徹底せる念佛に聲援ます。佛の起きた、引越さし、進まんとする折、祖廟の聽法室に於て念佛三昧會開經の山を承り、故山井上人の御手引に依り結衆の末席に列した。及ばず年々も智識の進むにつれ、經驗の積むに從つて信仰心は精進されて來り、亦念佛が唱へられるにつけて信仰心の妙趣が透つて來る、實に尊い哉。

一昨年よりは昨年、昨年よりは今年、何となく心地が違つて來るのは是れ偏にみおやの御力である、信前を荒れ蕪野原の落葉の中に親もなく子もなく、衣も食

となり佛教は再び哲學と隨在して俱舍唯識を云ふもの有れども念佛の聲は次第に微かならんとす、今や第二の法上人の出づべきの秋なり。

扱てし現代はうるさき事である哉、宗教家は哲學を厭すること能はず、哲學者は理論に捉はれ物質文明の餘弊宿々として現代人の心髓に迄も喰ひ入らんとす。本に還れ、事實なくして理論ありや將た現象ありや絶對を認めずして哲學ありや絶對とは何ぞや言詮を絶したる事實の境地是なり。事實の境地は言詮の上に非ず、若し人あり説を立て、之が眞理なりと主張するも其の主眼全部が其人の認めたる全體ならば其人は眞理の實際を掴みたるものと云ふべからず、何とぞれば眞理の事實は言詮を離れたる所にありて之を理論に現すことは其の一部分に過ぎざればなり、譬へば茲に林檎を食ひたる人と林檎を見たる人ありと假定せよ、認めたる理論は林檎の輪廓にして内容にあらず、事實の味を表現すべき言詮は其一部分に過ぎざればなり、茲に於てか林檎は理論の上に在ること勿論なるも理論の全部は

も住もなき弱々しく假死状態にある肉の塊りであるとするならば今は私の東にも西にも南にも北にも上にも下にも、私を中心として六方の諸佛は在り、七百年己前の元祖様は今茲に居るをぞ、而して聖觀は立ち居起き臥し徹存し給ふなり、其中に若ばしく慕はしく懐かしく、心安らかに生活し得る、力強き子に甦れるもこのよと確信す、此の強き力に勵まされて今後倍々勇猛に精進せんぞ念願して居ります。

本年(大正八年)三月三昧會の第六日の未明の實感に

みほとけのやさしき胸にいだかれて  
たつとも應るも阿彌陀佛

### 本に歸れ

恒 夏村 山

長承、建曆の昔、法上人現れて當時の論議維れ事とせる佛敎界に一旗を立て一大覺醒を興ひ給へしより茲に七百年、法燈運綿として現今に至ると雖も世は澆季

林檎の全部に非ず、即ち理論は吾人の味ひたる事實は理論の尺度に一致すれば是る即ち理論の上に事實あり事實は理論にあらず、映れる哉現代の人士之の見易き道理すら悟る能はず直覺の境地も汝の靈は永遠に眠れるか。讀書萬卷、汝の讀に任す然れども汝の心にこそ作られたる見解は傾て汝の心に依りて破れん、哲學の究竟地は自己を超越するにあり、書を抛て絶對を嘆美するにあり唯一の事實其れは主觀の上にあらざりて主觀を超越したる客觀的客體に在る。徳本上人曰く、學問は無量の衆衆になりてから、身投度すりや日が暮れてくる。宗祖大師曰く、唯往生極樂の爲には消無阿彌陀佛と申て、疑なく云々、嗚呼この境地知る人を知る、寒毛豎立せずして此の二句を讀み得る人は眞の宗教家に非ず。

幸に山崎上人あり吾等の靈を醒すに足る、諸子よ心を洗つて上人の天の聲を聴け、而して全生命を投じて念佛の道をたざれ、脚下を見れば生死の巖頭千仞の谷底雲霧縹々危い哉。